

## B34c 可視光度時間変動による低光度活動銀河核探査

諸隈 智貴 (東京大学)

可視域での光度変動は、1960年代のクエーサーの発見直後から認識され、その後、色選択とともに、クエーサー選択に光度変動という手法が可視域では使われてきている。また、GALEX衛星による近傍LINERの紫外線でのモニター観測からは、多くのLINERから中心核変動が検出されており、活動性の低い活動銀河核の存在が示唆されている。近年、ハッブル宇宙望遠鏡やすばる望遠鏡などの広視野カメラを用いた深探査データを用いた時間変動天体探査により、より低光度の、母銀河の星成分の卓越した活動銀河核が同定されるようになった。このうち数10%の低光度活動銀河核は、X線深撮像データで検出されておらず、可視時間変動は、X線とは独立な探査方法となりうる手法であることが示されている。これら低光度活動銀河核の母銀河は、様々な形態や色を持ち、母銀河と超巨大ブラックホールの共進化の観点から、今後の研究の進展が望まれる分野である。本講演では、これまでの観測結果をまとめるとともに、我々のすばる望遠鏡Hyper Suprime-Cam(2013年秋開始予定)、木曾シュミット望遠鏡KWFC(2012年4月開始)でのサーベイについて紹介する。